ブレーズ・サンドラール小伝（5）

加　太　宏　邦

仕事は独仏語の通訳・翻訳。ペテルブルグの時計宝飾店で、契約期間は2年。初めての仕事でもあるし又特殊な仕事なので少なくとも3カ月の見習いをモスクワの店でやらなければならないとの事だった。

ロシア。この巨大な帝国はこの夏の初め、満州の広野で日本と戦いの最中であった。明治37年夏、日本人の全てがロシアを注目していた時、わがフレデリック＝ルイ・ソゼも突然にこの国の事を自分の事として考えるようになる。関心は洪水のようにとてつもない勢いで彼の中に入って来た。8月22日遼陽大会戦。ロシアの敗北。シベリア横断鉄道の完成。農民の反乱。専制政治打倒のための解放同盟のアピール。アントン・チェホフの死。苛酷な弾圧でロシア人の怨嗟の的となっていたプレーヴェの暗殺事件。

9月12日フレディはヌシャテル城内の州庁へ出かけた。パスポート申請のためである。今日その原簿が残っている。1904年の発券記録の内の第233番。

> 苗字：ソゼ、名：フレデリック＝ルイ、宗教：プロテスタント、職業：店員、本籍：ジグリスヴィル（ベルン州）、居住地：ヌシャテル、目的地：ロシア、有効期間：2年、発券日：9月12日、手交日：同14日、身長：167㎝、年齢：17歳〔ほんの10日ほど前が誕生日だった〕、髪：栗色、髭：無、眉毛：栗色、眼：緑灰色、鼻：普通、鼻：大〔！〕、口：普通、顎：丸、顔：長、肌の色：普通。

当時はロシアへ行くヨーロッパ人が大層多かった。この発券原簿でも10人中6人はロシアを目的地としている。一番多いのが家庭教師である。コック、仕立屋というのもある。帝政ロシアの特別な階層の求人の形がよく反映している。フレディの場合はまた別の社会事情をよく表しているのだが、その事は後に述べる事になるだろう。

パスポートを手にしたフレディはいささかの荷物を作り母に別れを告げる。父と兄はバーゼルの町まで送ると言ってくれた。この町で旧友のパウル・ハーベル

ボッシュにも会い新しい人生の門出を少年らしい高揚した口吻で告げた。パウルは専門学校時代の友人でフレディはヌシャテルへ移ってからも文通を続けていた。ドイツ語を書くのを忘れないでいられたのはおそらくそのためではないかと思われる。久し振りで顔を見、久し振りにドイツ語を喋った。

名残りは尽きなかったが、一方では新しい世界への旅立ちにそのはやる心をおさえきれない。

少年を乗せた列車はバーゼルを出てチューリヒを通りウィーンからチェコ（当時はハプスブルグ家の支配下にあった）、ポーランド（当時ここはもうロシア領だった）を通り抜け今のソヴィエト領に入った。

ロシア領に入るとやたらにパスポートの検査が厳しくなった。政情の不安定の現れだということは少年にも判った。しかしそんなことどうでもよい。窓から見える景色が東へ進めば進むほど荒涼としてくる方が気になる。二昼夜走ったが時折、昏い村が現れるだけだった。それが少年の気持ちを重く寂しくした。農家は殆どが粗末な藁ぶき屋根だった。石炭が無いらしく、どこの駅も薪を山積みしていた。町らしい町もこの長い旅程で数えるほどしか無く、例えばミンスク、スモレンスクと言うような所も、誰でもが知ってはいるが外国人の旅行客は誰も降り立たなかった。

父や母から遠く離れ来たという、ひどく不安定な気持ちをどう処理していいか判らないうちに3千キロの旅は終ってしまった。9月も終り、冬の風が吹きだしていた。

モスクワのスモレンスク駅に降りたつとワッとばかり御者がたかってきた。市電もたくさん出ていたが、行く先をしめすロシア文字もロシア語も分らない。本当に大変な所へ来たという実感にこの17歳の少年は烈しく身震いをした。そこへ立派な髭を蓄えた、見習先からの迎えの男が来てくれなければそのまま再びスイスへ帰っていたかもしれない。

この15年で人口が約二倍にふくれあがったモスクワ。そこには無秩序と不潔さと猥雑さとアジア的「後進性」が入り乱れていた。人口は正確に分らないがなんでも150万だという。昔、住んだあの元気のいいナポリでも50万そこそこだった。

見ると色んな人種がいる。聞くところによると三分の一は非スラヴ系だという。

特に珍しいのがタタール人だった。もともとモスクワはこのアジア系の民族とロシア人との抗争で生まれた町で、むしろタタール人となんとも不思議な調和をしていた。見た感じ、2人にひとりはタタール人の様だった。実際、ホテルや酒場の給仕、商店の売り子、夜警、アパートの管理人、召使などはほとんどがこのアジア人だった。

ロンドンより市域は広いと言われながらが大抵、2階建以下の木造で市街というよりただ雑然と拡がる村だった。そんな町並にねぎぼうずが黄色にてらてらと光りニョキニョキそびえていた。彼は後、詩人になってその美しい部分をこう書いた。

> 「モスクワはナポリの聖女さまの様に美しい。セルリアン・ブルーの空が幾千もの塔、鐘楼に映え、色を映しだし、緩縞をつくりだしている。塔はそびえ、伸びをし、いきり立ち、ときに重たげに沈みこんで朝顔の形や球根の形となって煮えたつ鍋からにょっきり立ち上る玉虫色の鐘乳石と言うか光のソウ麺のよう。」

そして街のにぎわいをこう描いた。

> 「みんながどなり、叫んでいる、髭もじゃの水運び人も、古着売りのタタール商人も。店もチャペルも歩道に溢れでている。背の低いばあさんたちがクリミヤ産の虫こぶみたいにつやつやしたリンゴを売っている。顎髭をはやした警官が長いサーベルにもたれている。みんな、栗のいがやトネリコの小さな黒い実の殻を踏みしだきバリバリいわせて歩く。馬糞の粉末が空中でブランデーの中の褐色の金粉みたいに浮遊している。広場をけたたましいきしみ音をたてて市電がカーブしていくすぐ横に＜イワナシの実＞と称する果物がピラミッド状に、と言っても実は西瓜か瓜。腐った魚の鼻つく異臭が獣皮のすえた匂いに被さるようにえげつなく漂う。」

ここで、ルゥーバ宝飾屋モスクワ支店に引取られた彼は、少年の素早さと好奇心の力であらゆる物を呑み込んでいった。時計、宝飾についての取引といささかの技術、そしてロシア語などよりも一層、はてしなく厚かましく湯気を立てて生きている人間の姿を。ヒトロフ広場の貧民窟、ドヤ街、泥棒市、ギリシャ教会の前に群がる乞食、スハレフ広場の古物露天市、何でも頭の上に乗せて商売するレ

モネード売りやいちご売りの姿、辻々に立っている、黄色い鑑札を持った街娼、街中至る所にあるやたら大きい看板、木造平屋建の銭湯とそこに働く三助たち、モスクワ大学の学生のバンカラぶり、柄の長いひ杓と桶を乗せた肥取車．．．

当時、モスクワやサンクト＝ペテルブルグで文化的にも物質的にも豊かだったのはルゥーパなどが属している大商人階級だったが、商業技術、勤勉そして故国にいるより外国の方がましという条件の三拍子揃ったドイツ人（おもに南ドイツから）、スイス人（おもにアレマニク）などが特にここへ進出してきたのである。（ニコライ二世の妃がドイツ人であったことも関係あるかもしれない）。ロシア帝国内のドイツ人は実に２百万人を数えこれに加えてフレディのような出稼人が30万人いたといわれる。これらのゲルマン人達は商人だけでなく高級官僚や学者や農業経営者となり豊かな階層を形成しつつあった。ただ彼らはなかなかロシア社会に溶け込まず、特別の世界をつくり、そこにマンハイムとかチュリッヒなどという地名すら付けていたという。（フランス人達がどちらかというと貴族の栄光の名残にひっついて職を得ていたのとかなりちがうことがよくわかる。）

フレディ少年をいわば学校地獄から救いだしてくれたこの時計宝飾屋もアレマニク系のスイス人で、ただしソゼー家と同様、何代か前に、スイス・ロマンド地方に移住していた人らしい。ルゥーパー家にとってこのような豊かなドイツ人やスイス人の特別社会は自らの身を寄せるコロニーであると同時に、又、大切な市場の一つであった。

市場はもう一つあった。フランス語を喋る上流階層である。ドミトロフカ通りは貴族屋敷が連なる最も豪華な通りとして知られていたが、フレディ少年がそこを歩いた頃には門柱の貴族の家紋が次々と消え始めて、いずれもロシア大商人達の住まいと変っていた。しかし彼らの生活のしきたりは当然、「先代」の貴族のそれでありあいかわらずフランス的であった。

宝飾屋のように金持を相手に商売をするものにとって、フランス語とドイツ語の両方が必要なのは以上のような事情に基づき、そこにフレディが登場するのはやや大袈裟な言い方になるが、ロシアの社会構造の一つの必然的帰結であったのだ。

少年フレディがネクタイにハイカラを着け、いっぱしの格好をしているモスク

ワ時代の写真が一枚ある。それは両親のもとに送られたもので、15人の群像写真である。その内７人は女性だが、フレディを除くあと７人がいずれも立派な髭をつけた男性で、もしかしたら７組の夫婦かもしれない。書き記されたいくつかの苗字はマテイだとかヴァシュロンだとかブルカンだとか明らかにヌシャテルに独特の名前で、ここに、ヌシャテルだけとは言わないまでもスイスのコロニーがあったことをうかがわせる。

見習の三ケ月はまたたくまに過ぎた。あけて１９０５年１月１日（露暦）、モスクワからサンクト＝ペテルブルグへと移ることになった。三月前にモスクワに着いた時、街の中を行き交っていたのは普通の馬車だったが今はもう馬橇に変っている。

モスクワのニコライ駅。見習期間に世話をしてくれた人々が見送りに来てくれた。ロシアの習慣でまず発車の15分前にベルが１度鳴る。次に５分前に２回目が、２度なる。最後に、３度連続で鳴るといよいよ発車である。21時30分。

モスクワからサンクト＝ペテルブルグまでは、いやになるくらい真っ直ぐで平坦である。なんでもこの両都間の鉄路の建設の当時、その路線の選択について当局者間に三案あってなかなか議決しなく、ニコライ一世の前でその図を開いて裁可を仰ぐと、帝は直ちに定規とペンとを取り二都間に一直線をサッと引いて、それがそのまま今の路線になったという。この時ペンが指に当たってずれて四ケ所すこし曲ったがそれもそのまま採用されたというようなおまけがついている。

夜行列車は窓が三重になっていて寝室は広々していた。夜がやっと白みだした朝の11時にサンクト＝ペテルブルグのニコライ駅に列車は着いた。

町の人口はモスクワと同程度と聞いてきたが、その印象は全くと言っていいほど違った。町が人工的で整然とし貴族的でその美観は彼が写真などで見るパリと比べても遜色の無いものであった。たいそう西ヨーロッパ的で、ロシアのあらゆる風景からむしろ不自然にぬきん出た感じがした。

ここで２年の契約で仕事をする。勤め先はルゥーバ時計宝飾店。住所、ゴロホヴァヤ通り（エンドウ豆通り）34番地。この通りは、サンクト＝ペテルブルグの真ん中にあり、ネヴァ河畔の海軍本部の正門に直角に入る、大通りである。1950年７月からサヴォシュキン通りと改名されているが、目抜き通りのひとつである

ことに変りない。

フレディは着いた翌日から仕事に就いた。ルゥーバ家の人も、モスクワ同様この町にある<スイス村>の人々も大層親密にしてくれた。頻りに故郷の話を彼に求めたが、彼には語るべきこともなく又どうして皆がそうするのか分らなかった。初めてモスクワに降り立った時のあのやるせない不安と切ない郷愁は束の間の幻としてモスクワの悪臭と喧騒の中に消えてしまった。彼の中に根を立ち切られた詩人がだんだんに生まれつつあった。

ピーテル（サンクト＝ペテルブルグの俗称）に着いて９日目に、フレディはロシア社会の奥底がはっきり見えるような事件に遭遇した。その日は日曜日だった。昨日からめずらしく晴天が続いていた。雪のせいもあって町はあかるく輝いていた。11時ごろ町の至る所から人間がわきでてきてぞろぞろと行進をし、それは冬宮に向かっているようだった。「なんですか」とルゥーバさんに聞くと「ツァーリに請願に行く労働者達らしい」と不安げに答えた。それぞれの行進の先頭にはツァーリの肖像や教会の旗、イコンが掲げられ隊列には大勢の女や子供もいた。

しばらく窓から見ていると、突然、遠くの方でパン、パン、と濁いた音がした。それから急に静かになった。そして再びまた、パンパンと今度はかなり連続した音が鳴り響き、それに続いて、ウォーという喚声が地から湧き上り冬の空を一杯にした。フレディは飛び出して何が起こったのか見に行こうとした。「よしなさい。危ない」ルゥーバさんが彼を押し止めた。また音がした。たしかに銃声である。

人々の流れが逆流し始めた。ネフスキ通りからゴロホヴァヤ通りへ逃げまどう人が入り込んできた。血に染まった老人が仲間の肩にもたれ、よろけながら歩いて来た。土気色した婦人が二人の青年に担がれフレディの見ていた窓の下を通った。何人かの若い女性が赤十字の腕章をして怪我人らしい労働者に付添っていたが、彼女達の内の一人は泣いていた。雪道に血の滴りが続いた。叫び声がはてしなく聞こえた。又、銃声がきこえた。一段と人の動きが烈しくなった。走っている人もいた。

また、負傷者が担がれてきた。誰かが何か叫んだ。すると皆一斉に帽子をとって見送った。その時そこを橇で通りかかった将校が群集に取かこまれた。皆は口ぐちに罵声を浴びせかけた。フレディはロシア語の判る仲間に、聞こえて来る言

葉を通訳してもらった。「殉教者に帽子を取って敬礼しろ」「兄弟殺し」「日本軍からは退却し同胞は撃つのか」。

目と鼻の先の＜保安課＞（革命運動取締りの秘密警察）から刑事が出てきて将校を救出した。

攻防は3時頃まで続いた。騎兵や歩兵の中隊が出て来て群集を荒っぽい手段で追い立始めた。再びネフスキ通りから押し戻された群集はゴーゴリ通りやモルスカヤ通りをとおってゴロホヴァヤ通りに溢れて来た。どの顔にも絶望の色が浮かんでいた。十字架やニコライ2世の肖像写真を脇に抱いて三々五々家路につく者が多くなりだした。

1905年、明治38年1月9日（西暦22日）、歴史に言う＜血の日曜日＞がフレディの目の前で、日暮と共に、終ろうとしていた。気温は－8℃まで下がった。

10万人に近い市民が35歳の若い司祭ガポンの指導のもと、皇帝に非暴力的に直訴をするため冬宮をめざし行進し軍隊に武力で鎮圧され、政府の公式発表では死者76名という数字にもかかわらず、実際は2千人とも4千人とも言われる死者をだしたこの出来事を、スイスで聞いて、革命のプレリュードだ、と歓喜の叫び声を上げた一人のロシア人がいた。35歳のレーニンである。

ジュネーヴに亡命中のレーニン。彼は、ジュネーヴに集ったボルシェヴィキの同志と、ほんの二週間ほど前に、『ヴペリオド（前進）』を創刊したところであった。

その日曜日はスイスでも好天気であった。レーニンは妻のクループスカヤと久々のゆっくりした休日を過ごした。翌日、月曜日の朝、彼は例によって、グランリュにある読書協会で仕事をするためデュフール通り3番地の自宅からパスチョン公園へ向かって考え事をしながら歩いていた。ジュネーヴ大学前の喫茶店ランドルトに寄って行こうかとふと思ったとき、向こうから、同志ルナチャルスキの奥さんが興奮した顔付で、駆けて来るのが目に入った。余りに興奮しすぎて口がきけないようで、手にした新聞を、振回してレーニンに走り寄って来てこわばった顔付で差出した。新聞は「ラ・スイス」であった。

〝ロシアに革命〟という大見出。その報はたちまちジュネーヴにいるロシアの政治亡命者達（150人はいたと言われる）に伝わり、カルージュ通り（彼らはカルージュカと呼んでいた）の93番地の『ヴペリオド』編集室にはボルシェヴィキ

同志が続々集りだした。ニュースは次々と入って来た。そしてレーニン達らの動きが又ニュースとなってスイスで報道された。この翌日の「トリビュン・ド・ジュネーヴ」紙（かれらはトリブンカと言っていた）は次の様に報じている。

「ジュネーヴのロシア人達：昨日ハントヴェルク会館でロシア人の極めて多くの社会主義者、革命社会主義者の集会が行われた。論題は日曜日のサンクト＝ペテルブルグ事件であった。多くの論者がストライキをした同志を讃え警察を非難した。一人の演者が連帯の挨拶を送る事を提案した。スイス警察は会場とロシア領事館の警戒にあたった。」

この集会は夜の11時まで続き、その後ブランパレあたりでデモ行進をし、夜中の１時までインターナショナルを歌って気勢を揚げた。こうやって亡命ロシア人やスイスの社会主義者達は全スイスで集会やデモをした。ジュネーヴでは、ボルシェヴィキもメンシェヴィキも一緒になって、虐殺に対する抗議集会が開かれ、各国の革命家三千人が集った。ルナチャルスキーやトロツキーがそれぞれの党派を代表して演説をした。

レーニンはすぐに、次号の『ヴペリオド』の巻頭記事を書いて、「サンクト＝ペテルブルグのプロレタリア英雄のこの手本は今や衆人の眼前にある。革命万歳！蜂起せるプロレタリアート万歳！」と結び、大いにアジテートした。

スイス人のフレディはロシアで革命の夜明けを目撃し、ロシア人のレーニンはスイスでそのニュースに興奮をした。

ペテルブルグでのストライキは今年に入ってから烈しくなっていたが、それが以前にも増して拡大していった。サンドラールは着いてまだ日が浅く、実感が湧かなかったこの国の社会の仕組み、労働運動の政治的意味が一挙に見えて来たのである。

血の日曜日事件から、ロシアの平民達はツァーリのお慈悲にすがると言う素朴な伝統的方法に初めて強い疑問を抱きはじめた。十字架やイコンを掲げてデモをするのでなく、もっとラディカルに運動することに理解を示し始めた。

10日、発電所の労働者達がストに入ったので、ネフスキ通りもゴロホヴァヤ通りも夕刻から真っ暗になってしまった。工場という工場がストライキに入りゼネストの様相を呈してきた。ピーク時のスト参加者の数は15万人という。

しかし、13日に入って、ストは徐々に解除され始め、フレディの店も商売が再

開された。来る客は普通、労働者階級ではなかったにもかかわらず、大抵がツァーリを批判した。ある病院のドクトルが来て、あの日曜日、当院だけで103人担ぎ込まれて来たが、内34人はすでに死体となっていた、入院した負傷者の内さらに11人がベッドで息を引取りましたよ、と沈うつな顔付で語った。

フレディは、もし、今回の事が発端となって、この国にフランス革命の様な本格的な革命が起こるような事があるとすれば、それはまさにツァーリのお陰ではないかと思った。モスクワで感じた、素朴で、運命に耐える強靭な精神性を持ち信仰心の篤いロシアの民衆。その彼らの神とも崇めるニコライ二世が自分達に銃と剣を向けてきたのだ。あたかも、汝ら余に幻想を抱くでない、と鉄槌を振るわれたようではないか。もちろん、当のニコライ二世は、善良ではあるが政治感覚のひどく欠落した人物で、皇太子時代、日本の大津で刺されてひどい目にあったのがなにかケチの付き初めで、こののち、非業の死を遂げる。帝の日記の1月9日の所は次の様になっている。

「日曜日。重苦しい日だ。ペテルブルグで労働者たちが直訴のために冬宮に入ろうと望んだ結果、深刻な暴動が起こった。軍隊はペテルブルグのさまざまの場所で発砲しなければならず、多くの人が殺され、負傷した。なんと重苦しく、心の痛む出来事だったか。ママが、朝のお祈りのためにペテルブルグからやって来た。全員一緒に昼食をとり、そのあとミーシャと散歩した。ママはこの夜は私たちのところにいた」（保田孝一訳）

要するに、事件の因果関係、問題の社会性、政治性に全くノンシャランの大甘で、とりえはその教養人ふうの良心的言辞というところ。サンドラールもレーニンもその手のヒューマニズムは持合わせなかった。

血の日曜日の先頭にたった司祭ガポンは亡命し、3月20日、ジュネーヴでレーニンと合流した。そして、5月には第一次革命が、また6月14日、有名な戦艦ポチョムキン号の反乱が起こり、その首謀者の水兵マチュシェンコも又、ジュネーヴへやって来て、同志として仲間に加わった。

＜スイス村＞の人々はペテルブルグでは支配的な階層で、ある意味では、ロシア民衆の敵であった。工場などの管理職の大半がドイツ人やスイス人で、フレディはロシアとスイスの二つの社会に生活をしていることが分かっていてそのどちらにもよりどころを求めなかった。

歴史の上の一つの出来事が、サンクト＝ペテルブルグとジュネーヴであるいはロシアとスイスで繋っていた。フレディは漠然とながら外の世界の存在こそが自分を生かす基盤であり、また関係という事なしには自己が成立ち得ないということを感じていた。のちの彼の著作のひとつ『モラヴァジーヌ』では、創作とはいえ、この事件を自分の事件として、またスイスとも結び付く事件として捕えている。

確乎たる寄りどころを欲しがったり、チマチマと収まろうとするのと正反対のサンドラールという人間が育ちつつあった。ペテルスブルグ時代の一枚の写真、そのなかの彼は口髭をはやし始めていた。

（以下次号）

（参考文献は連載最終回にまとめて記す予定）

（既刊内容）

▶ロマンディ創刊号（1978年）（絶版）

J. de Rham 国際協会長のことば

ペスタロッチ＝ペソー200年記念　高宮　紳夫

セルマ・ラゲルローヴ　森　洋子

ウミユリの写真と象徴　加太　宏邦

▶ロマンディ第二号（1979年）（残部僅少）

ラミュとメルトール教授　杉山　毅

ル・マキ・スイス　島　久美子

ホール・トゥルニエ紹介　森　洋子

スイスのキャスターヴ・ルー　加太　宏邦

▶ロマンディ第三号（1981年）（残部あり）

ヒッシャとその言語理論　稲山富美子

スイス文献　覚　ヒッシュ特集　大浜幾久子

アイス・リヴァ『心の川辺をかぞえよ』　加太　宏邦

▶ロマンディ第四号（1982年）（残部あり）

ラミュの思想　A・ベガン／杉山毅（訳）

トピックニュースになった「ロマンディ」　阿部　汎克

スイスと四つの相撲の恋喜劇　鈴木　光子

瑞西独り　松島　正

ブレーズ・サンドラール小伝（1）　加太　宏邦

▶ロマンディ第五号（1982年）（残部あり）

ラミュの家　浜崎　史朗

ある瞬間　シュセ／井田清（訳）

シュセ「エデ－透明体」　加太　宏邦

ブレーズ・サンドラール小伝（2）　加太　宏邦

陽　蔭　ユーディット・ヤーキ

▶ロマンディ第六号（1983年）（残部僅少）

ミュゾットの谷　阿部　汎克

廃　下　シュセ／井田清（訳）

ブレーズ・サンドラール小伝（3）　加太　宏邦

ペルニオの夢　板橋　薫

フランコ－プロヴァンスの方言材究会の報告を読んで　神内　正治

▶ロマンディ第七号（1984年）（残部あり）

フェルナン・シャヴァンヌ　浜崎　史朗

密らかに語れ　シュセ／井田清（訳）

サンドラール小伝（4）　加太　宏邦

モノーの道　相磯　和嘉

スイス・アレマニックに暮して　竹内　典子

ティチーノの夏　渡部　容子